

# キャリア・パスポートの効果的な活用を図った実践

興部町立沙留小学校 学級数8 (校長 井上 暁博)

## I 実践テーマの趣旨

本校では、平成29年度から、主に特別活動において「キャリア・パスポート」を活用している。活動の目標や成果をキャリア・パスポートに記入することにより、児童は自身の変容や成長を振り返ることができるとともに、教師は児童理解をより深め、特別活動はもとより、学校教育活動全体に反映させている。

## II 実践の概要

### 1 委員会活動での活用例

右の図は、委員会活動の振り返りで活用した実践例である。「何をしたのか」「がんばれたことは何か」「次回のめあて」等を、端的に記録させることで、自分の行動を客観的に見ることができるようになっている。

児童は、自身の変容や成長を確認でき、「次回は〇〇をがんばってみよう！」と目的意識をもって活動に臨むことができるようになる。これらは特別活動においては、非常に重要であり、活動の価値を高めることにもつながっている。

児童会活動振り返り 前期



今日の委員会で、

- ①自分ががんばったこと
- ②友だちのよかったところ
- ③今度がんばりたいこと

などを書きましょう。

✉書 委員会

名前 \_\_\_\_\_

◎とてもよい    ○よい  
△ふつう        ×もう少し

日付	振り返り	がんばり度
	つぎはいけんを言う。	△
	いけんを言えた。 <small>よく考え、自分の意見を言うことができたね。</small>	○
	ポスター作りががんばった。 <small>有海に何とやら良いの、自分の関心とめてきましたね！すっごくいい◎</small>	○
	本をえらぶのをがんばった。 <small>自分で選べたね！ 発表もがんばろうね！</small>	○
	かんじょうをよむのをがんばった◎ <small>本をたくさん読むと成長しますね、読書した通り筆にがんばろう◎</small>	◎

\* がんばり活動がしたいが、5年生、6年生の意見も聞いてじっくり考えてみよう◎振り返り

【児童会活動を振り返るページ】

### 2 児童理解のための活用例

右の図は、児童の記録に、教師がメッセージを返している実践例である。キャリア・パスポートに何を記録させるのかという観点はとても大切だが、記録させたものをどのように活用するのかという観点が最も大切である。

本校では、児童に書かせて終わりではなく、教師がメッセージを返し、児童の頑張りや願いを教師が認めたり、受け止めたりすることにより、自己肯定感を高めている。

次がんばりたいこと、アドバイスなど

いけんをいっぺん言いたい



がんばろう！

担当の先生から

前期で「委員会ってこんなふうにするんだな。」とわかったと思います。きんちょうもしたよね。次々委員会では、たくさん自分の考えを発表してね！

【児童理解のための活用例】

## III 取組の成果と課題

### 1 成果：自己肯定感を高める

キャリア・パスポートを活用することにより、「〇〇を目標に活動してみよう。」「〇〇ができたようになった。」と、目的意識をもって活動に取り組んだり、達成感を味わったりすることができた。自己肯定感が高まることで、特別活動だけではなく、各教科等の学習にもよい影響を与えている。

### 2 課題：端的なコメントから進化させる

キャリア・パスポートをさらに効果的に活用していくためには、端的なコメントではなく、児童が、後に振り返った時に、様子や状況、自分の考えなどを思い出すことができるような文章で記録していく必要がある。

# 小中9年間を見通した海洋教育の推進

～散布を誇れる児童生徒の育成を目指して～

浜中町立散布小中学校 学級数9 (校長 中村 研自)

## I はじめに

本校は小中併置校であり、令和元年度から北海道教育委員会の海洋教育パイオニアスクールプログラム実践校として小学校が指定を受けているが、小中学校が協力して9年間を見通した海洋教育に取り組んでいる。児童生徒は、それまで本校周辺の豊かな自然や水産業の価値を当然のこととして認識しており、携わる人々の苦労や努力について関心が低い傾向にあったことから、地域の海や水産業、自然環境についての探究活動を通じ、地域の発展に貢献できる人材の育成を図る特別な教育課程「散布学（海洋編）」を編成し、実践に取り組んでいる。

## II 実践の概要

### 1 教育内容や方法の明確化

#### (1) 教育課程の編成

これまで中学校で取り組んできた「あさり島活動」を軸に、海洋教育4つの視点から各学年で取り組むテーマを設定し教育課程を編成している。

また、「散布学（海洋編）」を通して、児童生徒に育成したい力を「海洋と人の関係及び海を通じた世界の人々との結び付きについて理解し、10年、20年後の浜中町を支える人材として持続可能な社会の形成者として必要な力」とし、「主体性」や「課題発見力」、「発信力」等を重視している。

#### (2) 学びのスタイルの確立

「学びのスタイル」として、基本的な学習過程を課題の自覚化を図る「体験的な活動」、課題を自分事として捉え解決を図る「探究的な活動」、自分の思いや考えを表現する「発信活動」と設定している。

また、児童生徒の実態や地域住民の期待も踏まえ、特に「発信力」を育成する「発信活動」を重視し、小学校第5、6学年では、連携校の北海道厚岸翔洋高等学校の生徒並びに厚岸味覚ターミナルコンキリエの職員へ散布の水産業や地域の魅力についてプレゼンテーションを実施、中学校第1～3学年では、「海洋の保全」や「持続可能な地域づくり」等について学んだことを基に、地域の魅力を発信する動画を英語で作成し、ホームページに掲載するなどの取組を実施している。

これらのことにより、児童生徒は、身近な海に関心をもち、調べたことや感じたこと、考えたことについて目的や相手を意識しながら工夫して発信しようとする意欲が育まれている。

### 2 外部支援体制の充実

各種の活動においては、散布地区学校運営協議会や役場、散布漁協、霧多布湿原センター等の全面的な協力を得ている。各種活動の際は、関係機関と教職員等で事前の打合せを行い、地域の現状や課題、児童生徒に育成したい力について共通理解を図った取組を実施している。12月には、保護者や地域住民、関係機関の職員等を対象に学習の成果を発表する「地域大感謝祭」を実施し、参加者の意見や感想を「散布学（海洋編）」の検証・改善に役立てている。

## III 成果と課題

- 児童生徒アンケートでは「興味があることに進んで取り組んでいる」と回答した割合が平成30年度から上昇するなど、「散布学（海洋編）」の探究的な学習を通じて、児童生徒が地域のよさや課題について関心をもち、自ら課題を見つけ解決しようとする主体性が育まれている。
- 保護者アンケートでは「学校は子ども一人一人が自立を目指して成長できる教育活動を行っている」と回答した割合が平成30年度から上昇するなど、「散布学（海洋編）」の実践を通して保護者や地域住民と共に児童生徒の育成を図ることができている。
- 「散布学（海洋編）」について、児童生徒に、よりグローバルな視点から散布の魅力を再確認させることや児童生徒により確かな力を育成することを目指し、学習内容や取組について、検証・改善を進める必要がある。

1 各学年で取り組むテーマ				
学年	1・2年	3・4年	5・6年	中学1～3年
1年生	○きせつとなかよし はるなつ ○きせつとなかよし あき	○海と山のつながり	○あさりの生態を調べよう	○あさり島再生活動
2年生	○めざせ生きものはかせ	○散布の海の仕事を調べよう	○私たちの海を守ろう	○発信、散布の魅力
備考	主に生活科で実施	特別教育課程「散布学(海洋編)」	特別教育課程「散布学(海洋編)」	主に総合的な学習の時間で実施

  

2 学習コンセプト(「海洋教育4つの視点」より)				
学年	1・2年	3・4年	5・6年	中学1～3年
コンセプト	A 海に親しむ B 海を知る	A 海に親しむ B 海を知る C 海を守る	B 海を知る C 海を守る D 海を利用する	A 海に親しむ B 海を知る C 海を守る D 海を利用する

【各学年で取り組むテーマ】

学びのスタイル	具体的活動(例)
体験的な活動	・遊びを通じた自然とのふれあい ・海浜清掃等への参加 ・あさり島、昆布干場、養殖場等での漁業体験 ・漁協、加工場等の見学 ・漁業従事者の話を聞く 等
探究的な活動	・海の状態を調べる方法について話し合う ・生き物や海洋環境に関する調査、観察、実験 ・漁業従事者へのインタビュー ・漁業カレンダー、地域マップづくり ・海と陸のつながりに関する調べ学習 等
発信活動	・流木や貝殻等を使った遊びの発表 ・漁業や海洋環境等に関する調べ学習の発表 ・キャラクターづくり、新しい調理方法の考案等、地域のブランドに関する提案 ・これからの漁業の在り方に関するHP等での発信 等

小中9年間で子どもたちに身につけさせたい力

- 散布の海から世界に動きかける力
- 地域の未来をよりよくしていこうとする力
- 将来の散布を担うために必要な力

本校では、この「体験」「探究」「発信」をタテ軸に、「時間経過」をヨコ軸に据え、次年度以降の年間カリキュラムを作成した。

【学びのスタイル】



【霧多布湿原センターと連携した海岸のゴミ拾い】